

報恩抄

御文①

御書新版……212字 1行目〜4行目
御書全集……293字 1行目〜3行目

夫^それ、老^{ろう}狐^こは塚^{つか}をあとにせず、白^{はく}亀^き
は毛^{もう}宝^{ほう}が恩^{おん}をほうず。畜^{ちく}生^{しょう}すら、かく
のごとし。い^況おうや人^{じん}倫^{りん}をや。されば、
古^{いにしえ}の賢^{けん}者^{じゃ}・予^よ讓^{じょう}とい^いし者^{もの}は劍^{つるぎ}をの^のみ^み
て智^ち伯^{はく}が恩^{おん}にあ^当て、こ^弘う演^{えん}と申^{まを}せし臣^{しん}
下^{しも}は腹^{はら}をさ^割いて衛^{えい}の懿^い公^{こう}が肝^{きも}を入^いれた
り。いかにい^況おうや、仏^{ぶつ}教^{きょう}をな^習らわん
者^{もの}の、父^ふ母^ぼ・師^し匠^{しょう}・国^{くに}恩^{おん}をわ^忘するべしや。

現代語訳①

年老いた狐は亡くなる時には自分の生まれた丘の方に頭を向け、白い亀はかつて自分を助けてくれた毛宝の恩に報いたという。動物でもこのように恩を忘れないものである。まして人間であればなおさらである。

それ故、昔の賢者を見れば、予讓という者は、主君・智伯の恩に報いようと劍をのんで命を捨てた。また弘演という臣下は、主君にあたる衛国の懿公が殺され、肝臓だけが捨てられていたのを見て、それを自分の腹を割いて入れたという。

まして仏教を学ぼうとする者が、どうして父母の恩、師匠の恩、国の恩を忘れてよいだろうか。

御文②

御書新版……212頁5行目〜213頁1行目
御書全集……293頁3行目〜9行目

この大恩をほうぜんには、必ず仏法をならいきわ
め智者とならで叶うべきか。譬え、衆盲をみちび
かんには生盲の身にては橋河をわたしがたし、方・
風を弁えざらん大舟は諸商を導いて宝山にいたるべ
しや。仏法を習い極めんとおもわば、いとまあらず
ば叶うべからず。いとまあらんとおもわば、父母・
師匠・国主等に随つては叶うべからず。是非につけて、
出離の道をわきまえざらんほどは、父母・師匠等の
心に随うべからず。この義は、諸人おもわく、頭に
もはずれ冥にも叶うまじとおもう。しかれども、外
典の孝経にも、父母・主君に随わずして忠臣・孝人
なるようもみえたり。内典の仏経に云わく「恩を棄
てて無為に入るは、真実に恩を報ずる者なり」等
云々。比干が王に随わずして賢人のなをとり、悉達
太子の浄飯大王に背きて三界第一の孝となりし、こ
れなり。

現代語訳②

これらの大恩に報いるには、仏法を完全に習得し、智慧のある人となつてはじめて可能となるのではないか。譬えを示せば、目の不自由な人たちを導く場合に、自分自身が目が見えない身であつては、橋や河で人々を渡すことはできない。方位や風が分からない大船は、商人たちを導いて宝の山まで到達することができだろうか。

仏法を完全に習得しようと思うなら、時間が必要ならば不可能である。時間を作ろうと思うなら、父母・師匠・国主などに従つていては不可能である。いずれにせよ、生死の苦悩を脱する方法が分からないうちは、父母や師匠などの心に従つてはならない。

このような考えに対して、人々は「これでは世間の道理にも外れ、神仏の教えにもかかっていない」と思う。しかし、中国思想の聖典である『孝経』にも、父母・主君に従わないで忠臣や親孝行の人となることも説かれている。仏教の経典には「父母などからの恩に応えることをやめ、覚りの境地に至るなら、真実の報恩の者である」とある。

比干は、暴君である紂王に従わず、かえつて賢人と賞讃され、悉達太子が父の浄飯大王に背いて出家した結果、覚りを開いて釈尊となり世界一の親孝行の者となつたのは、このことである。